

氏 名	鯨 岡 峻
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	論 文 博 第 358 号
学位授与の日付	平 成 11 年 1 月 25 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	間主観的アプローチによる関係発達論の構築

(主査)

論文調査委員	教 授 清水御代明	教 授 苧 阪 直 行	助教授 藤 田 和 生
--------	-----------	-------------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、精神発達の理論とその研究方法を再検討し、従来の個体能力発達の考え方を批判して、新たに関係発達の観点に基づく研究法を提唱したもので、理論篇と、その理論に基づく研究成果を示す参加観察篇の2部で構成される。

第1部理論篇のプロローグでは、精神発達を個体能力の発達過程とみる従来の研究パラダイムを批判し、L.S. Vygotskyの「精神間から精神内へ」という標語を読み解くかたちで、新たな関係発達のパラダイムの必然性を主張する本論文全体の基本的な枠組みが提示される。

第1章では、今世紀初頭に観察日誌研究としてスタートした発達心理学が個体能力発達論として成立してくる経緯を明らかにすると共に、その成立が「発達」という全体的事象を個体能力へと抽象化し、幾多の重要な要因を捨象して初めて可能になったことを指摘する。この批判的見力に立って、本論文の主題である「子ども－養育者」関係について、従来の行動科学の枠組みの下では、子ども、養育者をそれぞれ閉じた個体とみなし、個と個の相互作用という観点からしかその関係が議論されてこなかった点を批判的に吟味する。これに対して関係発達論は「子ども－養育者」を最小単位とみなすが、このパラダイムを先取りする研究として、対象関係学派の初期母子関係論を取り上げ、その欲動論や自己論の内に、関係発達論の根幹をなす間主観性論と欲望論の基礎を見出している。

第2章では、論者は、個体発達研究から関係発達研究へという理論的方向づけの転換は、観察方法の刷新をも含み、従来の行動科学の客観主義的アプローチに対して、子どもや養育者の主観性の領域に踏み込む観察が必要であると主張する。他方、それが恣意的にならないための唯一の突破口が間主観的アプローチにあると論じられる。それは、発達の事象の生き生きとした息吹きに直接触れ、その「あるがまま」の相に迫り、研究者の身体が感受するものに基礎を置こうとする研究者の方法的態度を前提とする。この研究態度は、研究者自身が暗黙の内に抱え込んだ憶断を明るみに出しつつ、出会われる事象を研究者の暗黙の関心やいまだ潜勢したままの「理論」を背景にした「図」として捉え直す、ある意味で現象学的な方向づけをもつものである。生き生きとした事象と出会うためには現場に赴くことが必要となるが、それを広義の臨床的アプローチと捉え、研究者が生きた身体でその息吹きを感受することの重要性が指摘される。そして、この現象学的態度と臨床的態度という二つの方法的態度を重ね合わせたところに間主観的アプローチが成り立つことが強調される。

第3章では観察方法が論じられる。論者は、研究者が生きた身体を携えて事象の生起する場に赴くという方法的態度は、必然的に「関与しながらの観察」に導くという。この観察法が従来の客観主義的観察とどのように異なるかを明らかにしつつ、その観察法とそこにおける観察者の位置の問題が検討される。さらに、その観察態度の下に得られる重要な「発見」はエピソード記述の形でデータ化されることを明らかにし、それを読み解く形で当該発達の事象の「意味」を解明するのが本論文の基本的方法であることを、エピソード記述の方法手続の詳細とともに提示している。

第4章では、上記の方法論に基づいて、論者の関係発達論の骨格が明らかにされる。まず、前提的考察として人間存在の「両義性」にふれ、それを、他者との整合希求性と自己充実欲求の「根源的両義性」などの5つのテーゼの形で示すとともに

に、それが関係発達論の理論的土台となることが論じられる。次に、従来の素朴な発達観に含まれる「向上・進歩・完成」の発達イメージから脱却すべきことが主張され、それによって「乳児から大人へ」ではなく「誕生から死に至るまで」の真の生涯発達過程が理論的に展望可能になると論じられる。そして、それぞれの個体の生涯発達のある時相は、常にその一つ前の世代（養育者）の生涯発達のある時相、およびそれに後続する世代の生涯発達のある時相と重なって進行するほかはなく、従って関係発達とは、基本的には種の世代間および文化の世代間リサイクルに挟まれた、子ども－養育者間の行動的、心的関係の変容に他ならないという本論文の理論的骨子が述べられる。

このような新しい理論的枠組みと刷新された方法論の下に、「子ども－養育者」の関係を最初の1年間にわたって跡づけ、そこに展開される関係発達の諸事実を明らかにするのが第2部の本論「初期〈子ども－養育者〉関係の発達」である。

第5章では、一人の子どもの誕生は、すでに生涯発達過程を展開しつつある一組の男女のカップルの織り成す欲望の場が大きく揺さぶられる出来事であり、それゆえ妊娠・出産は、葛藤を孕みやすい生涯発達過程の一つの「危機」の位相にあることがその常態的過程と病理的過程とを対比させながら明らかにされる。ここにおいて、子どもと養育者は単に養育行動において結びついているのではなく、養育者の傾倒的関与によってその二者間に情動共有の経験が繰り返生まれ、それを基礎に「愛される－愛する」「信頼する－抱えてやってゆける」といった間主観的な繋がりが成り立ち、それによって「子ども－養育者」という一つの単位が切り分けられない形で変容していくという主張が、観察エピソードに基づいて展開される。

第6章では、子どもの運動行動能力の伸長と、子どもとの心的な繋がりを作り出そうとする養育者の「自己調整的関与」とが絡み合っ、そこに多様な「共に在る」状態が生まれ、それによって「子ども－養育者」の関係が拡大し、深まり、変容していく様相が観察事実に基づいて記述される。より具体的には、1) 物に手を伸ばそうとする子どもの行動と、物を掴ませようとする養育者の繋がり、2) 寝返る、座る、這うという子どもの行動能力の伸長と養育者の対応の変化の繋がり、3) 対面遊びの場面において、子どもの楽しみを膨らませようとする養育者と、その遊びに巻き込まれる子どもとの繋がり等が、従来の単なる行動的同期性を越えて、間主観的な繋がりとして現出する様子が示される。これによって、従来は単なる外部的相互作用として記述されてきた子ども－養育者間の行動的関わり合いが、実際には養育者の子どもに寄せる気持ちに大きく左右されていることが明らかにされたと主張される。

第7章では、生後8カ月以降に現れる共同注意、母親参照、指さし理解など、従来の発達研究の文脈で扱われてきた諸事実が、子ども－養育者間の間情動的、間主観的な関係の事実であることが、具体的エピソードを通して明らかにされる。特に「物のやりとり」が単なる二者間の行動的繋がりではなく、間主観的な関係として理解されるべきだと論じられる。論者はそれをC.Trevarthenに倣って第2次間主観性と呼び、乳児期初期の短時間の情動共有による間主観的な繋がりを第1次間主観性と呼んで区別する。この第2次間主観性の成り立ちこそ、「子ども－養育者」のあいだの心的繋がりの実質をなすもので、これはまた、初期の輪郭の不明瞭な、養育者の「受け手効果」としてあった子どもの自己性から、次第に輪郭の際立った、「手応え」を感じさせる自己性へと変化することでもあり、この経緯が多数のエピソード記述を通して示される。

論文審査の結果の要旨

本論文には副論文として2冊の既刊書『原初的コミュニケーションの諸相』（1997）および『両義性の発達心理学』（1998）が添えられているが、ここでは主として主論文について審査結果を報告する。

本論文の発達研究上の意義は、その新しい理論的展開、それを導く方法論上の新機軸、それによって明らかにされた諸事実という3点についてみることができる。

まず理論的展開に関しては、従来の発達心理学を個体能力発達研究と規定した上で、それが個別機能の発生的展開過程を解明する上に有効な戦略であったことを認めつつ、子どもの発達の包括的な理解を妨げる枠組みでもあったことを指摘し、「子ども」という概念自体「大人」（養育者）という概念と共軛的關係にあるとして、両者を分断して捉える方略は子どもの全体的理解には必ずしも有効でないと論断する。それを踏まえて、「関係論」の視点から発達概念を捉え直し、進歩向上という従来の素朴な発達観を括弧に入れることによって、初めて「子どもから大人へ」の発達心理学ではなく、「いま育てられる者が育てる者へと転回を遂げ、その生涯を閉じる」という世代間リサイクルを展望した真の生涯発達論が導かれると主張される。これは、従来の発達心理学に成人期、中年期、老年期の心理学を接続すれば生涯発達心理学になるかの如き現今

の生涯発達心理学の動きに対して明確な批判となるとともに、生涯発達論を首尾一貫した論理の上に展開することを可能にするものとして傾聴に価する。

次に、個体と個体の行動的相互作用の議論に終始してきた従来の初期母子関係論に対して、子どもと養育者の主観性の領域への「飛躍」が必要であると主張し、その目論見を身体的感受機能を基礎にした情動共有論と、それに基づく間主観性論に具体化することによって、原初的コミュニケーションや気持ちの分かり合いに関する理論的基礎を築いたことが挙げられる。最近我が国の発達研究の分野でも「関係論」や「間主観性」という用語が多用される傾向があるが、それらの語を用いる必然性が不明な議論が多い中で、本論文ではそれを理論的に整合する形で提示しているところに重要な意義が認められる。

この間主観性の問題圏を発達研究の射程に含める目論見には新しい方法論の展開が不可欠である。本論文が、関与しながらの観察とエピソードの抽出、およびそれについてのメタ観察とをセットにした方法を発達研究の分野に新たに開拓した点に大きい意義を認めることができる。それは研究者自身が生きた身体を携えて子どもと養育者の生活の場に赴き、その身体が感受するものを「間主観的に感得されたもの」としてそのエピソードに生命力を吹き込むことを必須の要件にして成り立つ方法である。この観察態度はきわめて実践的な色彩を帯びており、研究者＝観察者を無色透明な存在とすることによって客観性を保証しようとする従来の研究態度と鋭く対立する。「学知」と「実践知」に架橋する試みをも展望した、従来の研究枠組みを大きく刷新する方法態度だといえる。論者はこれを現象学と精神分析および発達臨床を導きの糸としながら、そこに自身の多年の観察体験を重ねることによって導き出し、発達研究の一つの方法論にまで練成している。この研究方法是発達研究のみならず、養育、保育、教育などの実践研究にとっても重要な意義をもつと考えられる。

この方法に基づいて提示される初期の「子ども－養育者」関係に関する諸事実のなかに、従来の研究枠組みでは理解することの難しい興味深い事実が浮かび上がる。まず第1に、養育者の関わりが、子どもの情動の動きを間主観的に把握した結果導かれるものであることがエピソード記述を通して示される。これは従来、子ども－養育者間の行動的相互作用と呼ばれてきた事実の裏面を解明しようとしたもので、そこに間主観的感得がその行動的相互作用を支配していることが説得的に示されている。たとえば子どもの示す愛着行動が、単に養育者に接近する行動なのではなく、両者がまさに間情動的、間主観的に繋がる情動共有経験を繰り返し、それに基づいて子どもの側に「信頼感」が、養育者側に「育児への自信」が生まれ、それが相通じるようになることによるものだという指摘は、このことを端的に示している。

第2に、広義の情動共有の事実が間身体的な共鳴・共振の現象として提示される一方、その間身体的繋がりが子ども、養育者のそれぞれに「成り込み」を引き起こし、「ここ」と「そこ」が転換するかのような不思議な現象がいくつかのエピソードによって示される。従来は養育者による子どもの気持ちの解釈とその代弁と言われてきた事実や、養育者の先取りの働きかけの事実は、この「成り込み」によって明快に説明される。「成り込み」の現象は、単に興味深い事実であるばかりでなく、特に養育者のそれは子ども－養育者関係を現実を駆動するものだという点で、保育、教育の場において実践的意義をもつ。

第3に、発達初期の子どもの自己性のありようが、養育者の「思いなし」によって大きく影響を受ける事実が明らかにされた。これは「子どもを主体として扱うことによって、子どもが主体になってゆく」という関係発達の最も重要な命題の基礎をなす「発見」だといえる。これによって、発達臨床上のさまざまな子どもの問題が、子どもへの対応だけでは不十分で、子どもと養育者の「あいだ」の調整が必要だという主張が導かれる。これは発達に躓く子どもの臨床に直結する重要な論点である。

第4に、子どもと養育者を一つの単位として観察することを通して、養育者が単に養育を与える人なのではなく、養育者自身、さまざまな欲望や葛藤を抱えつつ養育に従事する一方で、親として、養育者としてその発達途上にあることが明らかにされた。これは初期の子ども－養育者に関するこれまでの発達研究が、結局は子ども中心の研究であったことを反省させ、関係発達論においては「養育者からみた子ども」を重要な視点として含むべきことを強く示唆するものである。

間主観的観察の恣意性の排除には論者も特に意を用いており、論者自身の観察報告にはその効果がよく認められるが、一般的方法として論者以外の観察者が用いる時にも恣意性の排除が十分保証できるかどうかなど、論点が根源的であるだけに深刻な疑問も内包している。しかし、総括的にみて、本論文は発達の全体像を明らかにするための重要な観点を提案し、多年にわたる豊富な観察事例でそれを裏づけたものとして高く評価できる。

以上審査したところにより博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお1998年12月8日調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。